

岡本太郎さん、藤山一郎さん、野口富士男さん、そして岳父

——自由に学び遊んで才能を伸ばした竹馬の友——

エッセイスト 近藤 節夫

一、個性的な芸術家

画家・岡本太郎、声楽家・藤山一郎、そして作家・野口富士男。異なるジャンルでこれだけ世に知られた個性的な芸術家がひと括りにされれば、その意外な組み合わせに誰しも関心を抱き、幾許かの好奇心をそられるのではないだろうか。

揃って明治の末（明治四四年）に生れた偉大な芸術家たちは、幼少期に慶應義塾という学び舎で、ともに学びともに遊び、幾星霜を重ねて、それぞれの歩んだ道で傑出した業績を残された。この間世の多くの人びとに愛され、多くの人びとに惜しまれつつ、激動の二十世紀を駆け抜けて行ったのである。

これら三人の芸術家とは異なり、同じ慶應義塾幼稚舎（小学校）、普通部（中学校）でも学びながら、ただひとり大学から実業界へ進んだ、岳父・川手一郎（元日本軽金属株取締役会長）を加えた四人は、幼いころより自由に学び遊んで、一部では羨ましがられるほどの、知る人ぞ知る親しい遊び仲間だった。子どものころから一緒に遊んで遊ばわり、その親しい交友ぶりは、後年成人になってからも切磋琢磨して名を成すことになり、それでいてその親密さゆえに、周囲からは羨望の眼で見られていた。

幼稚舎とともに学び、ともに遊んだ竹馬の友として、気の合ったカルテットは終生友情を大切に持ち続けて、それぞれ得意の分野で遺憾なくその才能を発揮した。

一人ひとりが異能の持ち主は、本来ならば周囲の望むまま進学して、揃って慶應義塾大学を巣立つ筈であったが、持てる才能のゆえの天の差配だろうか、その後の進路においてそれぞれ袂を分つことになった。

二、岡本太郎さんと父

岡本一平、岡本かの子両芸術家両親の下で育てられた岡本太郎さんは、母かの子の実家があった、多摩川を隔てた神奈川県川崎に生れた。その後しばらくして東京・青山へ移り、幼いころよりその芸術的な天分を存分に発揮していた。幼稚舎（明治四四年二月二六日早生まれの太郎さんは、本来ほかの三人より一学年上級の筈であったが、一年遅れて編入し、揃って大正一三年に卒業した）から普通部を経て、希望していた東京美術学校洋画科へ進学された。しかし、まもなくして渡欧する両親に付き添ってフランスへ渡り、そのまま同地に留まることになり、東京美術学校を中途で退学することになった。フランスではパリ大学ソルボンヌ校で学びながら、セザンヌ、ゴッホ、ピカソに感動し、前衛芸術活動に影響を受け、次

第にシニール・リアリズムに引き込まれていった。研鑽の過程で少しずつ自らの進むべき方向性と、躍動的な抽象画の本質を悟った太郎さんは、内なる魂を《爆発》させ、在仏一〇年の歳月を経た後に帰国した。やがて、その創作活動において奔放な気性と感性から、芸術家魂が点火され、多彩な才能が芽を吹き、次第に画壇で名を成していくことになる。

戦後テレビ時代の到来に合わせて、その個性的な風貌と特異なパフォーマンスでテレビにも度々出演して、多くの日本人に茶目っ気とともに、勇気とエネルギーを与えてくれた。その後次々と独創的な作品を発表された岡本太郎さんは、大阪万博では「太陽の塔」を設計、制作して、その強烈なキャラクターと存在感によって世間をあっと驚かせ、多くの人びとを魅了した。大阪万博成功の最大の功績は、万博のシンボルである、この「太陽の塔」にこそあるといまでも多くの人びとに信じられている。

地元の小学校に馴染めなかった太郎さんは、近くの塾や学校を転々としたが、いずれも長続きせず、編入した幼稚舎に漸く自分の居場所を見つけたようだった。そして、青山の自宅から当時三田にあった幼稚舎（現在地・渋谷区恵比寿）まで毎日電車通学を楽しんでいた。

父兄参観日になると母かの子が学校へやってきた。かの子は世間では、家庭を放擲して母親失格の烙印を押されたように思われているが、実際には参観日になるとしばしば愛息太郎さんのために教室を訪れては、鼻水をたらしている太郎さんの鼻を拭いて甲斐甲斐しく面倒をみたり、毎朝きちんとお昼の弁当を太郎さんに持たせていたと父からよく聞かされた。かの子女史からいつも優しく頭を撫でてもらっていた父は、決してかの子は世間で言うような自堕落な母親ではなかったと弁護していたものである。

母かの子がどれほど一人っ子の太郎さんを愛おしく思っていたか、四人組のひとり、野口富士男さんが近くで観察している。

「かの子女史の一人息子である岡本太郎と私は慶應の幼稚舎、普通部を通じての同級生であったために、私は少年時代からよく岡本家へ遊びに行った。岡本家の二階で拳骨に兵児帯を巻きつけてボクシングをしたこともある。私が太郎の滞仏中、「三田文学」の編集長であった和木清三郎氏と、幼稚舎以来の同級生で「東京日日新聞」にいた大塚宣也の三人で一平、かの子夫妻に日比谷の山水楼へまねかれて中華料理をご馳走にあずかったのも、そういう過去をもっていたためであった。

『あたしね、野口さん。このごろ毎日、増永さんのレコードを聴いているのよ』

食事なかばに、かの子女史は言った。岡本太郎や私の同級には組は違ったが、歌手になった藤山一郎もいた。東京⑩チャンネルが『人に歴史あり』で増永を取り上げたときにも、岡本と私は引つ張り出されている。彼の本名は増永丈夫だから、『増永さんのレコード』とは『酒は泪か溜息か』や『丘を越えて』を指していた。女史が増永のレコードを聴いたり大塚と私を食事にさそったのは、パリにいた太郎を想う心のあらわれであった」（野口富士男著「作家の椅子」作品社刊）

普段は気難しそうにしている父だが、岡本太郎さんについて話すときは、決まって「太郎は、太郎は・・・」と言つては、懐かしそうに柔和な顔になる。太郎さんも作品制作に当つ

てアルミニウムを使用する時には、アルミに詳しい父にいつも気軽に相談しているようだった。

父の口癖である「太郎はクラスでいつもビリだった」という話に、藤山一郎さんが尾ひれをつけて、「太郎がビリで、おれがその前」と吹聴していたが、それがいつの間にか噂となつて、「岡本太郎がクラス五三人中五三番、藤山一郎が五二番」という不名誉な話が広がつて行つたが、高名なお二人はむしろこの噂を逆手にとつて弄び、幾分楽しんでいる風情があつた。それに野口さんも一枚加わり、「彼らは五三人中五二番と五三番であつたといつているから、私は恐らく五一番だつたらう」と自著（『いま道のべに』講談社刊）に書いている。

ある時傍で聞いていた息子が「じゃあ、おじいちゃんは五〇番？」「おじいちゃんはもつと上だ」と笑っていたが、私には東京音楽学校で首席だつた藤山さんが、普通部でブービーだつたとはとても信じられない。

三、藤山一郎さんと父

藤山一郎さんは、野口富士男さんが前著に紹介しているように、本名を増永丈夫さんと仰つた。東京・日本橋生まれの生粋の江戸っ子で、実家はモスリン問屋を営んでいた。幼稚舎時代から天才少年ぶりを遺憾なく發揮して、早くから童謡歌手としてデビューしていた。父から聞いたところでは、当時からよく授業を休んではコンクールに出て賞をもらつていたという。普通部から東京音楽学校声楽科へ進んだが、戦争前夜という暗黒の時代だつたせいか、明るくい人間性とテノールに近いバリトン歌手としての素晴らしい声質と能力を持ちながら、国際的なバリトン歌手としての出番にはあまり恵まれなかつた。しかし、最終学年時には、学内オペラで主役をこなし、その声量は大いなる飛躍の可能性をうかがわせ、その将来に期待を抱かせるものだつた。日比谷公会堂における「ローエングリン」では外国人歌手を堂々圧倒したと音楽学校内でも評判になつた。ところが、在学中に歌謡曲を吹き込んだ歌手「藤山一郎」が、実は増永丈夫の芸名であると学校当局の知るところとなり、学則違反で停学処分を受ける羽目になつた。

その芸名「藤山一郎」については諸説あり、日本一の歌手を目指して「フジヤマ」と名づけたとか、日光・華厳の滝へ投身自殺した、憧れの元一高生藤村操の一字から拝借したとか、或いはやはり幼稚舎時代の友人のひとりだつた「永藤パン店」の子息から「藤」の一字をもらい、「藤山」と命名したとか言われている。しかし、「一郎」については、父がいつも口癖のように言つていた『『一郎』って名前は、おれが増永にくれてやったんだ』というのが、普段から気安く付き合つていた交友関係から考えて、案外最も真実に近いのではないかと思つている。

プロの音楽家としての道を歩むことを選択したにも拘わらず、戦時色の濃い時代の空気に押し流され、歌謡曲や戦時歌を歌う機会の方が多く、藤山さんご自身にとつても内心忸怩たる思いがあつたのではないだろうか。戦局ははかばかしくなく藤山さんも度々戦地へ慰問に

出かけ、持ち歌の軍歌、「空の勇士」「燃ゆる大空」や、ご自分のヒット曲などを歌って最前線の兵士を慰労している。

二度目の南方慰問団の折り東部ジャワにおいて終戦を迎えた。その間ソロ村で地元の民謡「ブンガワン・ソロ」にめぐり合い、復員後その普及にも力を注いだ。

藤山さんは戦前戦後を通じて人気歌手として幅広く活躍された。戦前のヒット曲だけでも、「丘を越えて」「東京ラブソデイ」「影を慕いて」「青い背広で」「酒は泪か溜息か」「愛国行進曲」ほか、数え上げればきりが無い。戦後も「青い山脈」「長崎の鐘」「ニコライの鐘」などの名曲のほかにも、名前を聞いただけですつと歌詞が浮かんでくる歌謡曲がいっぱいある。それほど大衆的で親しみやすく、加えて歌唱力のある「流行歌手」だった。

終戦後は実力派歌手としてNHKでは第一回から紅白対抗歌合戦へ連続出場し、第一〇回から晩年まではオーケストラを指揮された。毎年一年間の締めくくりである紅白歌合戦の最後に、会場全体で歌う恒例の「蛍の光」は、タクトを揮う指揮者としての藤山さんの明るく健康的な存在感を強く印象づけてくれた。藤山さんのにこやかな笑顔と温もりのある指揮ぶりは、まさに一年を締めくくるに相応しいものだった。

藤山さんほど戦前から戦後の長きに亘り、多くの国民から愛された歌手はいなかったのではないかと思う。それほど実力と人気を兼ね備えた国民的歌手だったといえよう。

明るいお人柄のせいもあって、ユーモア溢れるエピソードも数多く残された。早慶戦で連敗続きの普通部時代に、早慶戦における「打倒！早稲田」を願い、応援歌として「若き血」が作られた。その歌唱指導をたかが中学生である藤山さんが、上級生や、今という高校生相手に厳しく行った。幸い願い通り新応援歌、「若き血」が霊験あらたかとなり、早慶戦に勝つことが出来た。ところが、ほっぺの赤い下級生ごときに指図された上級生にはそれが面白くなく、「下級生の分際で生意気だ！」と呼び出され、殴られて鼻血を出した。「これが本当の『若き血』です」と嘯っていたのは、藤山さんにまつわる有名なエピソードである。

四、野口富士男さんと父

三人の親友の中で父が一番親しくお付き合いしていたのが、おそらく作家の野口富士男さんだっただろう。それは、父にも幾分文学志向が強かったせいだと思う。父は芯から読書好きで、いつも居間でソファに腰掛けながらひとり読書を楽しんでいたが、ある時わたしに「君も本好きだから言うわけではないが、読書しない奴の言うことは大体信用出来ないよ」と言ったほどで、読書もしない若者の意見は聞いても参考にならないと、とりわけ読書嫌いの若者に厳しい見方をしていた。日ごろから文学書を中心に手当たり次第に読み漁っていた。そんなことから野口さんを通して文人との深いお付き合いもあった。

野口さんの書かれたものは、とりたてて派手さはないが堅実な文体で、玄人好みの洗練された格調の高さを誇っていた。さりげなく飾らない文体が生まれ、わたしには自由に筆を操る才に溢れていて格調高い文体から、井戸端の小話まで巧みに縫い上げる妙味を身につけて

いるように感じられる。僭越であるが言わせてもらえば、細やかで幽玄的な表現を操るように全体の核心へすつと入っていける、石川淳の世界を髣髴させる文体にも似た構文が絶妙で、それが多くの読者に評価された理由ではないかと考えている。その点で小説というより、むしろ卓越した洞察力と透徹な文章力を生かした評論活動において、「野口富士男の世界」を築かれたように思う。永井荷風、徳田秋声の厚い知遇を得られて、二人の作品に関する幾多の著作もものにされた。とりわけ秋声に関しては毎日芸術受賞作「徳田秋声伝」の業績で、文壇においても断然他者の追隨を許さなかった。

お人柄、作品、リーダーシップ等による文壇における影響力と偉大な功績は、伊藤桂一や川本三郎ら多くの作家の個人的な著作活動や、とりわけ文筆家の著作権交渉の過程において如実に反映されている。伊藤は、中国での長い軍隊生活のため国内情勢が疎かった時代に、野口さんの作品を通して国内における思想弾圧の様子を知ったという。また、税金や健康保険に関する国税局との交渉場面では、野口さんは文士の盾となって闘う交渉力と行動姿勢を示され、作家の生活権と権利擁護のために闘い、その奮闘ぶりは日本文藝家協会理事長として面目躍如たるものがあつたと後々まで語り草になっている。

読売文学賞を随筆紀行、小説の両部門で授賞したのを始め、毎日芸術賞、川端康成文学賞、菊池寛賞などのめばしい賞はほとんどさらっていったが、芥川賞と直木賞に関しては、作家としてのスタートが遅かったせいもあり、ほとんど縁がなかった。たった一度だけ、昭和二十九年上半期に「耳の中の風の声」が芥川賞候補作品に推されたものの、ついぞ受賞の榮に浴することはなかった。しかし、その文章構成力と絶妙な筆致は広く賞賛され、前記芥川賞選考において、選考委員のひとり舟橋聖一氏は、

「小生は野口と江口（榛一）を推した。野口は、年齢的にはもはや新人ではないという意見が多かったが、野口のような作家をカムバックさせたいという心は、『耳の中の風の声』が発表された当時の多くの文芸時評の中で、顕著にみられたところである。野口は一時スランプだった。病氣ばかりしているし、書くものにも精気がなかったが、『耳の中の風の声』から、スランプを脱し、立ち直りを示した」と高く評している。

野口さんは、岡本太郎さんと藤山一郎さんとは別の形で、ある意味ではネガティブな理由で、慶應義塾を中途退学することになった。野口さんが慶大予科を辞め、文化学院へ編入することになった経緯の中で、父は友情を通り越してお節介なほど深く関わっていたようである。少し長い野口さんの告白を前掲書（「いま道のべに」講談社刊）から引用してみる。

「・・・慶應義塾図書館の前庭には沈丁花が植えこまれていて、塾生のあいだには、その沈丁花の香りを感じた者は落第するというまことしやかなジンクスがあつた。

昭和四年に普通部生から大学の文学部予科生になっていた私は、翌五年の春をむかえても、沈丁花の香りなどまったく感じなかった。にもかかわらず、戦後になってからは昔なかつた南門が正門になってしまって、鉄格子の門扉はあつても閉めたことがないために幻の門とよばれていた以前の正門は、げんざい東門とよばれている。その幻の門―以前の正門を三月末になつてから、まだその時分には市電が走っていた三田通りのほうから坂をのぼって行って

通り抜けた私は、さらに図書館の前へ通じる石段をあがって行くと、反対に図書館のほうから降りてきた川手一郎に、想像もしていなかったことを言われた。

『お前、おっこつてるぞ』

『嘘オつけえ』

私は、信じなかった。一学期と二学期の成績から考えて、そんなはずはなかった。が、掲示板の前へ行ってみると、進級者の貼り紙の中に私の名はほんとうになかった。狐にまつまられた思いであった。

『こんな馬鹿なことねえよ』

私が言うと、

『また、かア』

川手の口から、そういう言葉が出た。

普通部二年生の一学期の終わりに、私は四十八人中だか四十九人中だかの四十八番か四十九番―クラスの最末席に席順が落ちた。が、川手の通信簿と付き合わせると、二人の判断はそんな筈がないという結論に達した。その結果、二学期になってから弁護士の子であった川手が担任の教師にねじこんでくれて、台帳の記載に遺漏のあったことが発見されたために、私は十七番か十八番になった。その席次の訂正を記入した担任教師の署名押印がある通信簿は、私が海軍に応召中母の家もろとも戦災で焼失してしまって、いまとなっては誰にも見せることのできる証拠もなくなつたが、存命している川手が、細部は失念しているにしろ、そういう事実があつたことだけは証明してくれるはずである。そのときと、同じケースだと私には思われた。が、今度は落第なので、事態は以前より数等深刻であつた。

『クサっちゃうなあ』

勉強ぎらいな私がせつかく心を入れかえて、今度はすこし成績があつたなという手応えを感じたときにかぎつて、こういう事態が生じる。二度ともそうだという思いが、私を暗くしていた。

『黙って引つ込む手はねえよ。・・・お前のクラスの担任は、なんて野郎だ』

同級生が社会へ出て、結婚をして、子供をもって、戦争が終つて、その子供等が次つぎと大学を出るようになったとき、川手ほど親身になつて学友の息子たちの就職の面倒をよくみた男はいない。言葉は荒いが、学生時代から彼は友情に厚かつた。その友情が、この直後に私の生涯を方向づけることになる。やはり、幼稚舎以来の同級生であつた大塚宣也が私を文学などというところでもない世界へ引つ張り込んだ張本人だとすれば、結果論ながら、それを補完するのが川手だと言つていいだろう。

『W―つていうんだ』

『聞かねえな。爺イか』

川手が知らなかつたのは、彼が法学部の学生だつたからばかりではない。W―はのちに《三田文学》にもエッセイなどを発表するようになったが、英文科を出て、教職についた最初の年に私たちを教えることになつたばかりの、文字通り新米教師であつた。

『そんな若造じゃ、教師仲間や事務の連中に顔がきかねえから厄介だな』

普通部を五年までいって卒業した私とは違って、四年修了で予科へ進んでいた川手は、さすがに私より一年多く大学生活を経験していただけにそんな機微にも通じていて、塾監局へ行けばW―の住所がわかるから、今日中に訪ねて行って話してみろと言った。当時の私は短気で怒りっぽかったから、川手は絶対に癪癪を起こさずに、あくまで下手に出ると注意することも忘れなかった。

訪ねても不在で無駄足になるので、夕刻まで時間つぶしをしてから行った。その日は朝から曇天で、W―の家は牛込の大曲の傍にあった。独身であったから両親の家に住んでいて、応接間へ通されると母堂が茶を運んできてくれた。

・・・・・・中略・・・・・・

私は自身の成績表と、学校の原簿を照合し直してもらいたいということだけを要求した。及第しているという自信があったから、懇願に類する語は一言も口にしなかった。手みやげを持参しなかったのも、泣き落としと思われなくなかったためである。が、W―は私の請託を頑として拒否した。牛込から三田まで行つて帳簿をめぐつてみてくれという、ただそれだけの教え子の願いをにべもなく峻拒した。秀才が、鈍才を見下す態度があらわであった。が、私は川手に注意されて行つたことを、ほぼ忠実に守った。

その家には、三十分もいなかったらう。小雨が降りはじめていたから、母堂が傘を持っていけと言ってくれたが、私は辞退した。いじじいになっていたからではない。借りた傘を返すために、その家をふたたび訪問することに耐えられない自身がわかつていたからであった。雨に濡れながら、その前年から開業したばかりの飯田橋駅まで歩いて鈴ヶ森のアパートへ戻った。

普通部から四年修了で来て私と文学部で同級になった森武之助は後年母校の文学部教授になったとき、幕末の歌人香川景樹の令孫で私の家にも遊びにきたことのある教員仲間の香川景松君と二人でよく私のことを話題にしては、私を落第させたW―をからかったそうである。後年のW―に私は一度も会ったことがないが、年齢をかさねてからも教員仲間では融通がきかぬことで評判だったと聞いている（この辺りに積年のうらみつらみが表れている―筆者註）。

四月から、もう一度一年生の授業を受け直したが、当然のことながら、学校は落第生だけを対象として教育をする場所ではない。前年と同じ教師が、前年と同じ教科書をテキストにして、前年とまったく同じことをしゃべっているのがばからしくて仕方がなかったから、私は三田まで行くことは行つても、仲間が溜り場になっていた喫茶店の白十字へ入りびたつて、コーヒーをのんでは煙草ばかりふかしていた。両切煙草一日八十本という私の喫煙量は、そのころにはじまったものであった。

『俺、学校をやめるよ』

川手に打ち明けたのは、もう五月のなかばを過ぎていただろう。

『馬鹿野郎、いまやめたら、お前は中学卒業になっちゃうぞ』

『いいじゃねえか』

『よかあねえよ。いまにきつと後悔するぞ』

後悔しないという確信はなかった。が、学校へ行く気もなかった。学校をやめてどうするという考えもかたまっていなかったので、行き場がないままに、三田へは行っていた。

『神田の文化学院って学校、知ってるか』

やはり白十字で川手からたずねられたのは、それから一週間ばかり後だったろう。私には、まったく耳にしたことのない校名であった。

『今度な、その学校に文学部が出来て、部長は菊池寛だそうだけど、教師は小説家なんかだそうだから、お前にあいいんじゃねえか。俺の叔父貴が彫刻をやってるんだけど、その美術部の教師をしているんで、行きさえすれば入学できるように話はつけてある。・・・ただ遊んでいたって仕様がねえから、そこへでも行ってみるよ』

今でも私は欠点だらけの人間だが、その時分には言い出したらきかないところがあって、川手は誰よりいちばんよくそれを知っていたから、先まわりをしてそういう手続きまでしておいてくれた。翌日私が文化学院へ行って見たのは、そこへ入学するつもりになったというよりも、たとえ形式だけにしろ川手の友情にこたえなくては悪いというだけの気持からであった・・・」

このように野口さんは幼稚舎入学以来「慶應ボーイ」に染まっていたにも拘わらず、不本意にも慶應義塾在籍一三年目で自主退学することになり、あっさり「慶應ボーイ」を返上してしまった。

しかし、父・川手一郎との交誼はそれ以後も男の友情以上の親しさを持っていつまでも続いていた。父は内輪ではいつも「慶應を辞めた野口に、しょうがねえからおれが文化学院を世話してやったんだ」と言って憚らなかった。

野口さんは、結局父の世話でわけあり学生たちの「吹き溜まりのような」（野口氏記）文化学院へ編入した。その当時文化学院は珍しい男女共学制で服装も自由な気風に、野口さんは初めびつくりしたようだったが、追々馴染んでいき、お互いに脛に傷を持つ者同士がともに学んでいると意識しながら、その中にも同士仲間を見つけて少しずつ文学への傾倒を深めていった。この中から後に名を成す人材を数多く排出するようになったが、野口さんはいくつかの同人誌の創刊、編集、発行に関わりながら、飯沢匡や戸川エマ、さらに旧制佐賀高校を放逐された二歳年長で、一年下の青地農らとつるんで、学園生活の中に活動の足場を築き自らの進路を歩み始めた。

文化学院に転校したことで、最終的に生涯の歩むべき道を見出し、自己を確立された野口さんは、よほど父に恩義を感じていたのか、後年になってから「自身の全集の年譜に次のように記している。

「五年三月、原級留めとなり、廃学を考えていたとき、幼稚舎以来の友・川手一郎のすすめで、五月末文化学院文学部に中途転校」（『野口富士男自選小説全集・下巻』、河出書房刊）
ふたりは晩年までしばしば会ったり、時には電話や手紙で交流を続け、お互いに言いたい

放題口角泡を飛ばしながらも親身の友情を温めあっていた。

野口さんはあるとき「この世のひとり」と題して、心温まるエピソードを新聞のコラム欄に紹介された。

「・・・(川手が)電話をよこしたとき、私は肺炎で床について高熱のために眠っていたが、『氷枕でもしてゆっくり寝かしといてやってください』と、そのとき彼は私の家内に言ったそうである。両親をうしなつた現在、私のことでそんな口をきくのはこの世にもう彼しかない。

『あたしは三十年ですけど、川手さんは五十年ですものね。その重みを感じました』
私が目をさましたとき、家内は言った。」

それが毎日新聞夕刊「茶の間」に掲載された日は、奇しくも父にとつて初孫にあたる筆者の長男が誕生した、「昭和四五年五月八日」で、まさに忘れがたい一日となつたのである。

五、個性を育んだ全人教育

四人は幼少期に「遊びは遊び、勉強は勉強」と聞かされつつ、慶應義塾の創立者・福沢諭吉翁の独立自尊の精神を伝承する校風、「各個人の能力や適性を、生徒自らが発見し、存分に成長させるさまざまな機会を提供する。この事実を幼・少・青年期それぞれの時期にふさわしい形で実践する」モットーに影響され、それぞれ自由闊達に遊び回ることが出来た。

大正時代に幼稚舎生活を送つた四人が、晩年まで兄弟のような契りを結んで交流を深めることが出来た背景には、紛れもなく私学の雄、慶應義塾に流れる「社中協力の精神」に基づく人間的な結びつきの強さが、与つて大いに力になったことと思われる。

クラスメートたちの仲の良い睦まじさの原点は、ひとつ教室内の課業(授業)だけに留まらず、しばしば行われたフィールドワークにあるように思える。交通網がまだ充分整備されず、物資も決して豊かとは言えないあの時代に、学校側がよくもここまで思えるくらい生徒を外へ連れ出し、情操教育面で思い切つたことをやってくれた。いま手元にある金文字で刻字された、古色蒼然たる「慶應義塾幼稚舎第二十七回卒業記念寫真帖」(大正一三年三月卒業)をめくっていると、佳き時代の模範とも呼べる、あるべき教育の理想に近いひとつの姿が浮かんでくる。

大正七年四月に入学し、K組とO組の二つのクラスに分けられた一〇三名の生徒たちは、大正一三年三月に卒業した。

この時代に初等教育ですでに『英語』を正課として学んでいたことは、極めて珍しいことであり、小学生に英語必修説が囁かれている昨今の状況を考えると、かなり先見性に富んだ教育ではなかったかと思う。黒板にも《Mother says I am her good little boy.》とか、《Now Santa Claus, please give me a racket.》と当時の英語の授業水準が分かる文章が書き残されている。

『地理』では、「地球の表面」「地球の大きさ」「子午線」「赤道」「経度」「緯度」等の言葉

の意味について、まだ地球全体像が実感として分かりにくい子どもたちに、自分たちの「居場所」とか、「立ち位置」を知るうえで、基本的な知識を授ける授業を行っていたことは、筆者の旅行体験に鑑みても、幼くして世界観を知るためにも極めて大切なことである。アルバムの授業風景から推察出来る広い教育的視点と洞察力には、いたく感銘を受けるほどである。

『図画』でも有馬が原へ写生に遠出したり、学芸会や、運動会の学校年間行事にも精を出していたようであるが、とりわけ驚かされるのは、東京から、また、親元から遠く離れることに教育のひとつの意味と効果を見出していたと思われる、たび重なるエクスカージョンの実施である。

四年生になると葉山・一色海岸へ魚介の採集に出かけ、五年生の夏には林間学校として日光を中心に一〇日間の行程で博物館に勤しんでいる。最終学年の六年生時には、今日でいう修学旅行であろうか、「海上旅行」と称して七月に、松島、仙台、浅虫、青森を経て北海道へ渡り函館、小樽、札幌まで訪れる大旅行を経験している。そして、卒業直前の三月には、改めて「卒業記念旅行」と名づけて、銚子の無線電信局や犬吠崎灯台まで見学しているのである。

こういう恵まれた教育環境の中で、四人は多くの友とともに、知を学び、智を悟り、情を知り、身を鍛え、愛を育み、大きく羽ばたいていった。

四人が育った家庭環境も、それぞれに大分異なっていたようである。太郎さんは青山の芸術家の家庭に、藤山さんは日本橋の裕福な商家に、野口さんは神楽坂の芸者置屋に、そして父・川手一郎は、ジョン万次郎の遠縁になる、弁護士家庭の一人息子として、幼稚園に一番近い芝に住んでいた。幼児期に家庭でも学校でもそれほど制約を受けず、のびのびと自由に遊び、遊ぶことが出来たことは、あの自由が抑圧され始めた大正デモクラシーの時代と、戦争の足音が聞こえる社会的に暗い昭和の初めにあつて、同時代の子どもたちに比べてみれば、多くの点で恵まれていたと言ふべきであろう。自由な発想とか創造性のようなものが相互に触発させる作用として大きく機能し、また、周囲から温かく優しい目を注がれていたことも、四人の天分や素質を開花させた大きな要因だったように思う。それぞれ異なる家庭環境の中に育ち、性格も異なる四人が、妙に気脈が相通ずるところがあつて、お互いに格別意識することもなく、あるがままに友だちの異質なエキスを受け入れ、自分の中で昇華させていった。それが、四人が四人、揃つてお互いを触発して、太郎さんが「芸術は爆発だ！」と哲学的に表現したことに象徴されているように、それぞれの分野で自らを爆発させた人生だったように思える。

六、追憶

一九八八年十一月、父は私たち家族と庭続きの東京・世田谷の自宅で、静かに息を引き取った。享年七八歳だった。その訃報を義兄・川手脩が野口さんへお伝えしたところ、野口さ

んはひどくガツカリされた。

「昨夕川手君のご急逝をお電話で伺いました折には、胸に詰まるものがございました。七十数年間にわたる古く長い交遊には、汲めども尽きぬさまざまな思いがこまごまといっぱいに詰まっております・・・」(義兄宛の翌日の書簡)

その時ご自分も肺がんによる二度目の手術を終えたばかりで外出もままならず、葬儀に参列出来ないお詫びをお悔やみの言葉とともに仰った。よほど親友との別れに立ち会えないことが辛かったのか、

「本来なら何をおいてもかけつけなくてはならぬ立場にありながら、もどかしさかぎりなく、口惜しさにみちあふれながら、わが家でひたすら掌を合わせております」

と居ても立ってもいられない追悼のお気持ちを託され、しばらくして義兄のもとへ送ってこられた二通目の書簡の結びには、こうも認められていた。

「・・・古い旧い友をうしなつて、葬儀にも通夜にも行けない身体の状態だったことがいかに残念であり、口惜しかったかをお察しの上、母上様にも不参の非礼をおゆるしいただきたくお願い申し上げます」

一九九三年三月、その野口富士男さんも逝かれた。八三歳だった。それから五カ月、後を追うように天才歌手、藤山一郎さんが天に召された。そして、《爆発》された岡本太郎さんは、「ふるさと」である慶應義塾(大学病院)へ里帰りされ、一九九六年一月、多くの人びとの愛惜の声に包まれながら、四人の最後に旅立って行かれた。享年八六歳だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

こうして新しい日本の夜明け、明治の末期に生を享け、大正、昭和、平成の四つの時代を奔放に、しかも遅く生きた仲良し四人組は、一世を風靡してこの世を去って行った。

いまお一人おひとりの写真を眺めていると、それぞれに良い人生を送られたなあと、そぞろ感慨を憶えずにはいられない。この世に生を享けて、心に決めたことを思い切つてやり遂げ、この世に大きな足跡を残された。周囲の人びとに幸せのおすそ分けもされて、それぞれに充実感と満足感を抱きながら人生を送ることが出来たことは、「男の本懐」として、これに過ぎるものはないと思う。その人生の過程で、家族に愛され、心の通い合う友とめぐり合い、終生交遊を続けられたことは、まさに人生の至福であり、心から喝采を送りたい気持ちでいっぱいである。

「人生における幸福」とは何だろうか。人それぞれに、その思いと感じ方はいろいろあるだろう。しかし、この竹馬の友・仲良し四人組は、間違いなく幸せな人生を送ることが出来たように思う。身内のひとりとしてそう固く信じるとともに、それぞれの个性的で自由な生涯を羨ましく思わずにはいられない。

きつと浄土でも幼稚園、普通部時代の稚気のまま、芸術論でも戦わしながら酒を酌み交わし楽しく時を過ごされているのではないかと思っている。